

田原市図書館ふしぎ文学半島プロジェクト2019
“ふしぎ文学の達人”が選んだ 「ふしぎ」 オススメ本

選者：金原瑞人氏（翻訳家・大学教授）

選者コメント

1.『ホール』 ピョン・ヘヨン作 カン・バンファ訳 書肆侃々房 2018

◆主人公は自動車事故で全身不随になった40代の男。妻は事故で死亡。男は退院してから自分の家にもどされ、ベッドで寝たきりになり、義母がほぼ毎日のように世話をしにくる。義母は男と妻の確執に気づくうちに冷淡になっていき、庭の草木をすべて抜いて、大きな穴を掘っていく。男は義母の不可解な行動に違和感を覚え、少しずつ体が動くようになるのを自覚して、なんとかしようと思うのだが……。恐怖と生理的な不快感がじわじわと攻めてくる。シャーリー・ジャクソン賞を受賞している。

2.『平成怪奇小説傑作集 1』 東雅夫編 東京創元社 2019

◆平成30年の間に書かれた日本の傑作「短編・掌編」怪奇小説を1作家1編を原則に集めたもの。松浦寿輝、篠田節子などの純文ばいものから、宮部みゆき、夢枕獏などのエンタメばいもの、はたまた、そろそろ忘れられかけている赤江瀑、日影丈吉などの作品まで15編が収録されている。どれも興味深いのだが、収録の条件のひとつに、「平成」らしいものをというのがあって、この趣向が素晴らしい。詳しくは全編を読んでから解説を。

3.『かわいい闇』 マリー・ポムピュイ、ファビアン・ヴェルマン作 原正人訳 2014

◆最初、子どもたちがお茶会でショコラを飲みながら楽しくすごしていると、上から気味の悪いベちゃベちゃした赤い塊が落ちてきて、みんないっしょに外に逃げだす。外は雨が降っている。そこまでがコマ割りされたマンガ風に描かれていて、ページをめくると、次はページいっぱい女の子の死体がリアルに描かれていて、その目や鼻や口から身長数センチの小人たちが外に出てきている。やがて雨が上がって空が晴れると、腐乱していく女の子の死体のそばで、小人たちのサバイバルゲームが展開する。グロテスクな物や情景を美しく描いた絵と、コミカルなキャラが引き起こす残酷な物語が見事に一体となったグラフィックノベル。



選者：東雅夫氏（アンソロジスト・文芸評論家）

4.『死者の饗宴』 ジョン・メトカーフ 横山茂雄、北川依子訳 国書刊行会 2019

◆去年から今年にかけては、英米怪奇小説紹介の稀に見る当たり年で、シールの『紫の雲』とかホワイ
ト『ルクンドオ』とかヴィシャック『メドゥーサ』とか、長らく邦訳が待望されながら実現していな
かったマニャックな名著が相次ぎ登場、怪奇党に随喜の涙を流させてやまない。その中でも本書は、きわ
めつきの一冊。過去に一度も単独の作品集が邦訳刊行されることのなかった幻の鬼才メトカーフの代表
作八篇を収録。なかでも「悪い土地」や「永代保有」に活写される、幽明一如の妖しい情景描写は、英
国怪奇小説の精華と呼ぶにふさわしく、陶然たる心地に誘われること必定だ。「ふたりの提督」や「ブ
レナーの息子」における一読呆然の展開にも乞御期待。

5.『怪奇骨董翻訳箱 ドイツ・オーストリア幻想短篇集』 垂野創一郎編訳 国書刊行会 2019

◆いまや絶滅危惧種となりつつある洋古書店の店頭見切本コーナーを漁っては、世に知られぬマイナ
ー作家たちの珠玉の怪奇幻想小説を拾い出して翻訳し、同人本として製本販売する……まさに当代に
おける文人趣味の権化（こちらも絶滅危惧種）ともいべき編訳者の仕事が、典雅な造本の大冊にま
とまった。前川道介や種村季弘の学統を受け継ぐ重厚なアンソロジーである。一部を除いて、聞いた
こともない作家ばかりだろうが、騙されたと思って読み進めていただきたい。西欧文化の中核という
べきドイツ・オーストリアの地に生み出された、綺想と幻妖の文学の魅力を、思うさま堪能できるは
ずだから。

6.『京都怪談巡礼』 堤邦彦 淡交社 2019

◆近世怪異小説や仏教説話研究の泰斗でありながら、「百物語の館」という怪談朗読・研究グループの
元締としても暗躍（？）する著者が、積年の学識をかたむけた京都怪談の案内書……などというと堅
苦しい学術書と早合点されそうだが、さにあらず。学生との対話形式による親しみやすい導入に加え
て、京都の歴史ある寺院の関係者へのインタビューなども交えた多面的構成で、ポップ&アカデミッ
クに京の都に今も息づく「ふしぎ」伝承が紹介されている。装幀やイラストも秀逸で、京都観光のお
供に携えて行きたい好著だ。



「ふしぎ番外編」

ふしぎ文学マスターお二人以外のゲストにも
オススメ本を選んでいただきました！

選者：島田尚幸氏（あいち妖怪保存会代表）

7.『怪魅型 KAMIGATA』 西日本化物・妖怪同好会 2019

◆2019年に刊行された「ふしぎ本」の中で最も印象に残った一冊。関西圏を中心に集められた執筆陣はバラエティに富んでおり、扱う対象もアプローチの仕方もバラバラである。所謂「化物・妖怪」は、定義が非常にしにくく、語られる文脈毎に異なると言っても過言ではない。だからこそ、色々な目線で楽しむことが可能となる。好きモノが集まったからこそできあがった、“異種格闘技戦”であり“ドリームマッチ”。妖怪馬鹿必見の一冊。

8.『京都怪談巡礼』 堤邦彦 淡交社 2019

◆京都に因んだ“怪異”や“妖怪”に関する本は、これまでも色々出版されてきた。その中でも、学術とエンターテインメントが見事に融合した形で展開されているというのは本書だけではないだろうか。「怪談フィールドワーク」では、筆者が様々な場所に訪れ、色々な人と話をしながら怪談の世界を掘り下げている。京の都に“記録”された怪を紐解いていく、謎解きのような高揚感を楽しめる一冊。

9.『ムー民俗奇譚 妖怪補遺々々』 黒史郎 学研プラス 2019

◆妖怪を探していると、しばしば「なんだこりゃ」という記述に出会うことがある。当然そんなモノは“普通”の妖怪本からは切り捨てられたり見向きもされなかったりする。でも、この本はそんな不遇(?)な妖怪たちを、ちゃんと集め、愛でている。「こう言う本を待っていた」と心から思うし、“よくわからない”からこそ、“妖怪”なのだということを再確認させてくれる一冊。田原の「かね堀り婆さん」も、いつか登場しないかと期待している。

※ 曇った夜、森の中から火が見えて、走り回るのは「カネ堀り婆さん」が金を探している、と渥美に伝わる。



リストの9タイトルは、
田原市図書館で
貸出・予約可能な資料です。
2019.8 作成